

2022 年度「拡大授業を見合う会」報告

1. 実施の主旨

これまでも、有志教員により「授業を見合う会」と称して校内で互いの授業を見合う機会を設けてきている。そこで交わされる企画者と参加者のコメントなどからも、教科の枠を越えて互いの授業を知る、自分の授業を見直す視点を獲得、授業について議論するきっかけが生まれるなど、様々な意義を持つ機会となっていることが感じられる。また、生徒については、学習者の個の発見、同じ学習者を対象としている教員側の様々な見方により、生徒の多面性を見出せる点での意義も大きい。「拡大授業を見合う会」は、このような校内の取り組みを文字通り拡大し、「開かれた授業研究・開かれた学校作り」につなげていくものとして、また、カリキュラムマネジメントにつながる授業改善サイクルの一つの手段として、外部に開いた形として試行していこうというものである。今年度、特にこの会に位置づけていないものでも物理や国語で、外部の見学者を招いて授業を公開したり、体育で四校研（筑波大学・附属小・附属中・附属高での合同研究会）として研究授業を実施したりということも行われている。そのように個々の教科・教員でそれぞれの規模で行うものも含めて、学校としてしやすい形、自由に、気軽に研鑽の機会を設けやすい環境作りをしていくということが、授業改善のサイクル作りにおいて本校で大事にすべきことだと考えている。

2. 2022 年度の実施

2022 年 6 月 29 日(水)第 1 回拡大授業を見合う会：数学

2022 年 9 月 24 日(土)第 2 回拡大授業を見合う会：国語

2022 年 11 月 29 日(火)第 3 回拡大授業を見合う会：社会

3. 各回の報告

(1)第 1 回拡大授業を見合う会：数学

◇日時：2022 年 6 月 29 日(水)第 5 校時(13:20～14:10)、第 6 校時(14:20～15:10)

◇教科・科目：数学・数学 B、数学 A

◇参加者：16 名

〈校内〉：10 名 小澤啓(物理)、岩田光弘(数学)、大堀健吾(数学)、毛利哲(数学)、山田研也(数学)、五十嵐学(地歴)、赤松幸紀(国語)、柳澤秀樹(化学)、藤本和哉(地歴)、畑綾乃(国語)

〈外部〉：6 名 真島秀行先生(お茶の水女子大学)／田神仁先生(法政大学)／荻野大吾先生(日本数学教育学会実践研究推進部副部長)／村松修巳先生(都立小松川高等学校)／西谷咲子先生(都立つばさ総合高等学校)／荒木太郎先生(都立つばさ総合高等学校)

◇授業内容

【第 2 学年・数学】

◆授業者：山田研也

◆科目：数学 B

◆対象：第 2 学年 6 組 40 名

◆単元：ベクトル・内積の導入

◆本時のねらい：ベクトルの新たな演算の定義を、既習事項を基にしながら、合理的な筋道で獲得する。

◆授業の内容：(1)導入(10 分)ベクトルの「積」を定義するとしたら、それはどのような場面かを考える
(2)展開①(15 分)2つのベクトルの大きさの積を「ベクトルの積」と定義としたときの問題点を考える



(3)展開②(20分)計算法則を保存するように定義するとしたら、どのような定義とすべきかを考える。

(4)まとめ(5分)次回以降、十分性の検証が必要であることを確認する

【第1学年・数学】

◆授業者：毛利哲

◆科目：数学A

◆対象：第1学年3組 41名

◆単元：場合の数と確率・場合の数

◆本時のねらい：場合の数について、漏れや重複がないように工夫して数える態度を身につける



◆授業の内容：(1)導入(5分)中学校で学習した確率に、どのようなものがあつたかを確認する

(2)展開①(25分)正三角形の個数を数える場合の数の問題を題材に、グループ活動を行う

(3)展開②(10分)経過を振り返りながら、和の法則と積の法則に気づかせ、まとめさせる

(4)まとめ(10分)練習問題を提示し、和の法則と積の法則の使い分けを確認する

◇協議会の様子

グループ単位やクラス全体で議論をしながら、アイデアを共有したり考えをまとめたりする場面については、外部の参加者より一定の評価があつた。一方、「本当にグループ活動を行う必要があつたのか、ただなんとなく話し合いをさせただけになっていなかったか」とか「言語活動に甘さがなかったか、教員が生徒の(練られていない)表現の意図を汲み取りすぎではないか」などの指摘もあつた。外部の方からは、本校教員間の教科を超えた闊達な議論について、評価をしていただいた。

(2)第2回拡大授業を見合う会：国語

◇日時：2022年9月24日(土)第4校時(11:40～12:30)、午後に協議会

◇教科・科目：国語・言語文化〔1年3組〕

◇参加者：17名

〈校内〉：5名 秋葉康浩(国語)勝田仁之(物理)・藤本和哉(地歴)・山田研也(数学)・熊田亘(公民)

〈校外〉：12名 高山実佐先生(國學院大學)／小沢貴雄先生(東京都立豊島高校)／稲井達也先生(大正大学)／細田広人先生(筑附中)／青山由紀先生(筑附小)／秋田哲郎先生(筑附中)／小川一美先生(東京都立小石川中等教育学校)／眞鍋香先生(東京都立東村山高等学校)／志村直子先生(東京都立新宿高校)／内山翔斗さん(國學院大學大学院博士前期課程)／古瀬智美さん(國學院大學大学院博士前期課程)／武笠慈栄さん(國學院大學大学院博士前期課程)／谷川翔吾さん(國學院大學大学院博士前期課程)

◇授業内容

【第1学年・言語文化】

◆授業者：畑綾乃

◆科目・対象：1年3組 39名 「言語文化：2単位」50分単位時間

◆単元：寓話から実社会における教訓を読み取り、寓話の持つ力を捉える

学習材…『戦国策』『漁夫利』『蛇足』、『良識派』安部公房 『言語文化』(大修館書店)

◆単元のねらい：(1)寓話を読解し、寓意を的確につかんで実社会における教訓を読み取る。

(2)創造的読解を通して、寓話の持つ「物語る力」について自分なりの考えを持つ。

◆本時のねらい：既習の寓話(漢文)とその寓意の関係理解を活用して、現代の寓話「良識派」の寓意を考察し、それを反映させた物語創作をする。

- ◆本時の内容：(1)寓意のメタ的把握。提出済みの「漁父之利」「蛇足」の現代シチュエーションを読み合わせ、「漁父之利」「蛇足」の原文における寓意とその共通点を捉える。
- (2)物語創作(グループワーク)。漢文の故事成語とその前後の文章を参考に、仮託を捉え、現代における具体的なシチュエーションを設定し、安部公房の「良識派」を寓話として挿入するショートストーリーを作る、Google ドキュメントでの4段階のワークで、グループ内で4人ともどれかの段階でのリーダーを担当しそのワークを進める役を担う。
- (3)個人リフレクション。グループ内役割の自己・相互評価、「良識派」の主題(教訓)の読み取り、「寓話」の持つ力についての考察(課題として期限までに提出)

◇授業公開の位置づけ

- ・Google コンテンツの活用による、新科目「言語文化」における課題への具体策を試行する
- ・グループワークの「一部の生徒に作業が偏る問題」に対するへの具体策を試行する
- ・新科目「言語文化」での現代文&古典の融合単元を実践し、検証する

◇協議会の様子

本校からの国語以外の教員、大学教員、高校教員、中学教員、中高一貫校教員、大学院生といった異なる立場の方々にご参加いただき、堅苦しくない形で各立ち位置からの意見が出され、いろいろな視点から授業を見直し検証することができた。事後の外部の方よりこの会自体への意見では、次のようなものが出された。

- ・外部の参加者同士も互いに刺激を受け合う場となり、異校種交流ができた
- ・継続的にこのような自由な議論の場が設けられることは意義も大きいと感じる
- ・教科を越えて授業で大切なことは何か、という根本的な部分の意見交換ができた
- ・社会の先生から「良識派」の作品評価が出て、他教科が入ると教材の見方が変わるということが新鮮だった
- ・物理の先生からの学習効果への鋭い指摘などがあり、教科の枠を取っ払って言い合える環境がよいと思った



(3)第3回拡大授業を見合う会：社会

◇日時：2022年11月29日(火)第2校時～第5校時(9:40～14:10)、協議会を含む

◇教科・科目：地理歴史科・歴史総合

◇参加者：(外部) 栃木県立真岡高校地歴科教員4名、
栃木県立鹿沼南高校地歴科教員1名

◇授業内容：

【第1学年・歴史総合】

- ◆授業者：藤本和哉
- ◆科目：歴史総合
- ◆対象：第1学年6組 41名
- ◆単元：戦間期
- ◆本時のねらい：これから学ぶ内容について、興味関心や課題意識を持ち、自らの疑問や知りたいことを問いの形で表現できるようにする。
- ◆授業の内容：戦間期の導入。中学校までの既習内容を基に、戦間期についての知識をグループワークで確認・共有し、それを起点に各自で問いを作った。問いを集約したのち、授業で扱いたいものをクラス全体で絞っていった。



【第1学年・歴史総合】

◆授業者：五十嵐学

◆科目：歴史総合

◆対象：第1学年1組 41名

◆単元：「大衆化」と私たち—政治

◆本時のねらい：大正政変の様子を学習し、19世紀後半のフランスの民主政の様子について、任意の資料を選択して擁護・批判をできるようにする。

◆授業の様子：同一の資料を根拠とした際に、資料の解釈によって擁護派と批判派の意見が分かれ、議論をすることができた。

◇協議会の様子

2つの授業の内容や方法に関する質疑をしたのち、年間指導計画の立て方、両校の生徒の違い(地域差も含めて)、評価の在り方などについても活発な議論が行われた。

◇実施の意義

今回は栃木県立真岡高校の教員指導力向上事業の一環であり、この前後に藤本が真岡高校を3回訪問、授業見学や研究協議を行った。先方の希望により、日常の授業(新奇なテーマを設定したり特別な準備をしたりしない授業)を見ていただいた。新科目が始まったばかりでどの学校も模索が続く中、授業実践を共有し意見交換をできたことは、両校の授業を改善していく契機になったと思われる。

4. 今後に向けて

新カリキュラムの組み立てやスクールポリシーの策定にあたって各教科や個々の教員の考えを集約した際、本校では「まずは授業を大事にすべき」という意見が多く、授業の質を高めていくことを重視するということは全教員に共通した意識として抽出されていた。また、本校は、筑波大学附属学校として将来構想の基本方針に「先導的教育拠点」、「教師教育拠点」を掲げている。このような本校において、将来構想委員としては5月の構想説明でもお話したとおり、教員の授業改善の機会の拡充と、カリキュラムマネジメントのサイクル作りをスタートする必要があると考えている。「拡大授業を見合う会」は、これまでの校内での「授業を見合う会」と並行して、互いの教科を知り、自由に研鑽を行える場を大切にしながら、教育研究校としての開かれた学校作りと、質の高い授業を担保する持続的な仕組み作りの一環として位置づけ、来年度以降も実施を続けて検証・改善していくことを予定している。

各教科の学会、研究会など開かれた授業研究の機会を設けて個々で自ら環境を整えている先生方もいる。本校はそのような方々から刺激を得られる機会も設けやすい環境であることも素地として、カリキュラムマネジメント推進の一環として、教科内はもちろん、教科を超えた校内、そして校内を越えた開かれた形での授業改善の活性化を図っていきたい。

実際の方法としては、外部の方を招いたり、公開したりすることを予定・希望している先生から委員に声をかけていただいて、その規模や主旨、位置づけに応じて相談しながら校内での通知やHPを活用した外部への通知等を行う、当日の掲示や、セッティングなどの実施における実務的なことを一緒に行う、というような気軽な形を考えているが、このあたりについても、皆さんのご意見を聞きながら進めていきたい。

